

月田秀子の昨日、今日、明日…

東京へ引っ越して、一年以上が経った。相変わらず地下鉄の路線図は手放せないが、街へ出る時の緊張は少しましになった。高1まで過ごした町とはいえ、育った頃の面影はみじんだにない。今住んでいるのは港区港南。最寄駅品川の新幹線のホームに立つと、我が家が見えるほどの超便利な所に住んでいる。とはいえ、出不精の私のこと、一週間一步も家を出ないこともある。14階の我が家の窓を開けると、ゴーという唸り声のような町の喧騒が飛び込んでくる。人の声とか、物売りの声とか、生活の音は一切聴こえてこない。天上人のような暮らしである。朝はカラスの鳴く声で目を覚ます。下町育ちの私は、そろそろ巷が恋しくなりかけている。

月一回、3泊4日の関西詣では続いている。大阪、京都でのライブは赤字とはいえ何とか続けてゆきたい。ライブ会場の近くに常宿をとっているせいか、ライブを終えてから飲み回ることにはなほだしい。昼間は、時間つぶしに大阪に住んでいた頃より、街を徘徊することが多くなった。前ぶれもなしにファンの方のやっている店に顔を出す。

先月は以前住んでいた鶴橋のアパート界隈を徘徊した。路店裏の「お好み焼や」に行った。いつ行っても、客は私一人だ。その気楽さと、ご夫婦の純朴さ、当たり前で作っているお好み焼きの味に惹かれている。いつも注文するのは決まって「いか豚玉」。最近、コンサートの案内のDMを出しても「転居先不明」で戻ってくる人が多いので、「ひょっとして、もうやってないかも」と思いながら訪ねてみた。私より少しだけ年上のご夫婦は相変わらず身を寄せ合いながら営業しておられた。背伸びせず、欲張らず生活すればどこでも生きていけるもんだ。私は自分の老後を重ねてホッとした。それから鶴橋商店街にある「パラム」という店をのぞいた。シャンソンを歌っている頃からのファンがやっているブティックだ。ゼロが一つ、いや二つほど多い商品ばかりで、「試着はただだからね」という彼女の言葉に甘えて、試着はさせていただくが、一着も買ったことがない。彼女のご主人が最近「猪飼野・追憶の1960年代」という写真集を出版された。様々なジャンルの在日の方々寄稿されているが、小説家の金石範氏の「追憶は存在の背景である。奥深い背景は記憶であり、歴史である」の言葉どおり、強烈に焼き付けられたモノクロのその写真1枚1枚に確かな在日の人たちの歴史が刻まれている。それをきっかけに昔話になり、共通の知り合いの名前が飛び交った。その本の装丁をされた貝原浩氏の鉛筆画集には、ポルトガルを題材にした作品がいくつかあった。興味をそそられ、翌日は貝原氏の個展に出かけた。氏にはあいにく会えなかったが、ギャラリーのご主人が、氏に電話をしてくれたところ同じ港区の住人らしい。また、奇しくもそのギャラリ

ーのご主人が私のコンサートにきたことがあるという。

出合いも再会も、じっとしてはありえない。今年はなるべく外に出て、いろいろな人に出会う機会を作ろうと思う。それが単なる点に終わろうか、線になろうか、はたまた面に広がるか、その都度考え選択してゆけばいいことなのだ。犬も歩けば棒に当たる、宝くじは当たらなくても、月田も歩けば小石につまずく。つまずいて転んでも、まあ、また起き上がる力のあるうちに。

私の歌との出合いが、皆様にとって、新たなる素晴らしい出合いにつながることを祈りながら、今年も精一杯歌ってゆこうと思う。

<映画「真実のマレーネ・ディートリッヒ」を観て思ったこと>

「真実のマレーネ・ディートリッヒ」を観た。大阪公演を控えて、プールで体力作りに励むか、映画で精神を満たすか、考えあぐねた結果、何か生きるヒントをもたらしてくれるのではないかというかすかな期待が、かなりきしみ始めた肉体に鞭打つことを上回った結果だ。

ナチス独裁に協力することを拒否して祖国ドイツを離れ、米国で女優としての地位を確立し、第二時世界大戦の戦火の中、前線で戦う連合軍の兵士達をあの「リリー・マルレーン」を歌いながら慰問するという使命を自らに課した「20世紀を駆け抜けた伝説の大女優」。ディートリッヒと同時代を生きた監督、女優、歌手等による彼女の逸話、彼女の映画のシーン、晩年の彼女のインタビュー、前線での慰問の映像等が網羅されたドキュメンタリーだった。それらによって彼女の内面の葛藤、愛、家族、苦しみ等が浮き彫りにされた作品ではあった。作品に対して批評する言葉を私は持たない。けれど、戦争という怪物の前に、人間は何ができるのか、いや何が失われてゆくのか、失わざるを得なくなってゆくのか？ということ、考えさせられた。もし、あの時代に生きていたら、私は、「慰問」などするだろうか？答えは、否、である。少なくともあの戦時下の日本で、特高が横行し、思想の自由もなく、「お国のために」天皇陛下バンザイ」と言いながら戦地に散ってゆこうとする兵士達の「慰問」には決して死んでも行かない。同じ表現者として、戦争のない日本に生きている（世界的にみれば、未だに戦火の耐えない時代に生きている）私は、何故歌うのだろうか？そんなことを思いながら、映画館を出、渋谷の雑踏を彷徨った。イラクで飛び交う砲弾はここまで届いては来ない。けれど愛する人を戦争で失う人たちが、今、この世界に、確かにいるのだ。

サムライ・月田秀子

江戸川ターナー

アルファマではじめて生のファドを聴いたのが25の時。バルバラが聴きたくてパリまで出掛けたシャンソン狂は、四半世紀経てみたら月田ファドの熱烈なファンの一人になってしまった。

思えばそれはリシュボアのテージョ川でなく、マノエル・デ・オリヴェイラ監督の映画に流れるドウロ河だったのだが、ドウロ渓谷を眺めていて美空ひばりの唱う「川の流れるように」を思い出し、映画評論なのにこんな文章を書いてしまったのだ。

「日本にひばりの歌があったように、ポルトガルには《ファド》がある。巷間の演歌あるいは怨歌か。リスボンの下町で酔っぱらいや街娼たちに歌われて続てきた怪し気な哀し気なファドの歌。アマリア・ロドリゲスのあの憂い声、色気に満ちて華やく歌声。人生に踊いた時、ふと自然に口からもれる一曲のファド。いまここに生きている者たちのための歌。そうだ、僕らにはいま、月田秀子の歌う《ファド》がある(…)」

まるで月田さんパクリのこの文章で、いずれにせよ、月田秀子の名前をはじめて活字化したのだった。

それから…さらにしばらくして、いまポルトガルがひそやかなブームだという。

料理、ワイン、ゆったりと構えた素朴で一本義なあの文化が。かつての「南蛮文化」が。《ファド》もまた？

キリスト教と共にもたらされた「南蛮文化」を最初に受容したのは、わが国では戦国時代の武家社会。薩摩の大名に初めて献上されたルビー色の「珍陀(ちんた)酒」は、まさしくポルトガル赤ワイン(ヴィーニョ・テント)にほかならない。カステラ、カルタ、ボタンなどのポルトガル語がどんどん日本語化していった。いかにも京風な響きの先斗(ほん)と町も、実は葡萄牙(ポルトガル)語が語源なのだ。

もちろん大名たちが酒宴の席でファドを愛でたという事実は考えにくい。歴史的にありえない。しかしながら、ファドの心、南蛮びとの《サウダーデ》を、行灯に照らされて紅く揺れるワインを舐めながら直観的に感じていた戦国武将がいたと想うのは愉快ではないか。サムライとファド、一本義な孤愁か、私は月田秀子にサムライを感じてしまうのである。

私は日々空手道の稽古に励んでいる。武道の心構えで生きている。

武道は決して暴力的なものではない。「武」という字は「戈」と「止」の二字から成りたつ会意文字である。中国最古の、紀元100年頃の後漢の字典『説文解字』では、「武は撫なり、止戈なり、禍乱を鎮撫するなり。禍乱を平定して人道の本に復せしめ、敵を愛撫統一することが、武の本義なり」と説かれている。「戦うことを止める」「敵を愛撫する」ことを本義とした。

飛躍的な言い方だが、武道の心は月田さんの《ファド》にも相通じるのではないか。

武道の相手(あるいは敵)は自分である。一生かけても勝てない、満たされないかも知れないこの道。二十三十代では終わらないし、六十七で何かが掴めれば御の字だろう。毎日の稽古が一期一会の真剣勝負なのだ。千だ万だと繰り返す同一反復としか見えない基本稽古、型の演武。その先の「何か」を求めて私の空手道はまだまだ続くし、月田秀子のファド(歩吾道)も続いていくのだろう。

月田秀子を聴くことは精神稽古にほかならない。凜として背筋をのばして丹田から唱う月田さんはまさにサムライの姿をしている。イベリア半島然としたあの美貌。しかし彼女の魂を垂直に貫くのは深い孤愁(サウダーデ)と幽玄の心。貴方は月田さんの描く美麗な水茎の跡を指先でなぞったことがあるか? 大和撫子である彼女の心の濃淡を玄の色で写すあの筆文字(もんじ)。

月田秀子の色は黒。玄妙な墨の世界。さらには血の滴(しずく)の色、赤。ヴィーニョ・テントの深紅。サウダーデの黒い夜に、この世にありもしない血の色をした紅の櫻の花が宙に舞う。そこで女サムライは唱う、「忍」の気持ちで。迷(ほとぼし)る愛? そうではない。月田秀子のファドには常に忍ぶ心がある。指先をもう少しのばせばとどくというのに、彼女は瞬間その手を止める。哀しみを出し尽くさない、愛を語りきならぬ、愛撫する腕をフッとゆるませる。忍ぶ心・空手的には寸止めの凜々シズム。泣き崩れない強さ、つまりはサムライなのだ。

師走の新宿、月の輝く夜に、小指から順に握った拳を膝に置いて月田秀子を全身全霊で聴いた。夏場のCD制作の頃かなりお疲れかなと心配していたのだが、当夜の月田さんには(多くの聴衆が見てとったであろうあの両の眼に)潤(ほと)びる艶気が甦っていた。これでよし。こうでなくっちゃ。見事な技を見せていただきました。

ありがとう、月田さん。押忍。

きうぴいライブレポ

「月田秀子コンサート2003」

12月10日(水) 東京・シアターサンモール
19日(金) 大阪・サンケイホール

プログラム

- 第一部：孤独・アルファマ/道の名前/モーラリアは夜/不如意/私の憂い/蜜の愛、苦い愛/涙/風の翼
第二部：汽車は八時に出る/ギターよ静かに/人生よありがとう/手枷/暗いはしけ/私のリシュボア/アマリア/大河の一滴

月田秀子のコンサートに行くに必ず思うのは「自分のような若輩者がこの会場にいいのか?」ということである。おそらくファドというもの、人生経験を経たあとに、じんとう心にしみこみ、サウダーデを感じさせ、言い換えれば若い者には重すぎてやりきれない感じがするのの原因だと思う。また、「若い人にはわかんないだろう」といった空気がそこはかたなく流れていることにも起因している。しかし、若い者は若い者で、それなりに感じることはある。それはときに「なぜポルトガルにこのような音楽が育ったのか」とか「なぜにこれほど重いのか」という単純な疑問として現れる。そして「ポルトガルギターって哀愁があつていい」「こういう歌もあるんだ。こういう歌を歌っている歌手もあるんだ」という結果に終わり、大半はそこから静かに、オトナの邪魔をせずに去っていく。

自分の場合はそうではなかった。単純に「月田秀子ってだあれ?」から入って、最初のコンサートで「・・・重い。重すぎる。怖い。」と度肝をぬかれ、そのち月田秀子という歌手の、ときに心配になってしまうような歌への入り方と時折ついでいけない思いのこみ上げ方、決してついでついでとは言わなければいけなくともそれでもついていってしまわせるステージング、そして彼女のファドへの立ち向かい方に興味をそそられたのである。

彼女の歌を聴きはじめてたつた二年しか経っていない。ファドを歌い始めて20年以上というから私はまだそのキャリアの十分の一しか知らないことになる。しかしこの二年で彼女は変わった、と思う(もちろん愛

わり続けているのだろうが)。ひとことでいうと、彼女の歌は「優しくなった」。直球統投型で、その勢いで聴衆を圧倒し、その迫力と表現力が最大の魅力になっていたところから、カーブを描きながらもこちらが受け止められる勢いになった、とでもいおうか。弱くなった、というのともまた違う。吼えられているような、しびれさせられるような感覚ではない、なにか、こちらが受け止める余裕を与えられ、かつ確実にひきこまれるようなステージである。時折聴く定例のライブなどで今年の夏の終わりからそれを感じていたが、今回のコンサートはそれを改めて感じさせるものであった。「年よ」と彼女は言うが、それだけではないだろう。歌やステージングそのものの成長であり、それが彼女の持つ非常に繊細な感性とその表現力を今までと違つかたちで映し出しているのではないだろうか。かつての「しゃかりき・来るならおいで」のアグレッシブさが非常に魅力だったのであろうというのは想像に難くない。しかし奥底で燃えたる炎が絶えない限り、これからも月田秀子は心に届く歌を歌い、違つかたちで聴衆をひきつけ続けていくと思う。

第二部ではおなじみ「汽車は八時に出る」から、9月に発売されたCDの曲目を中心に、ギターへの思いを熱く歌い、第一部のファドとはまた違う雰囲気でも聴くものをひきつけた。弾き語りには彼女のちょっと普段着な一面をのぞかせたが、大きめの会場でのコンサートで披露するにはやや不安定であったことは否めない。ただ、大切な、自分の愛する歌をしっかりと歌っている彼女の姿は非常に魅力的であり、聴衆をひきつけていたように思う。

しかしながら、やっぱり月田秀子はファドがいい。今回の公演で一番心に残った曲は、「不如意」で、いままでも聴いたなかでも出色の出来だった。かなり多くの人があの歌のあとでほろりと涙を流したのを見た。月田秀子の歌を聴き、彼女がアマリア・ロドリゲスの自伝のなかで一番心に残ったとステージで話した、「運命(ファド)とは、自らのさだめに逆らうことはできないとさること。自分の力ではどうにもならないこと。なぜなのかと問いつながら、なぜなのかわからないこと。それでも、なおも問い続けること。その問いに答えなどないことを知りながら。」という言葉の思い出しながら感じた、自分にとってそれをさとらせてくれるのは月田秀子のファドなのだ。

エピソード帖

ヒデコ、見合い前日の四苦八苦

内間天馬

「ウワーッ！大変だ！ウエストが1cm減ってる！」

見合いを明日に控えたヒデコの叫びは悲痛だった。念願だった理想の体型がやっと実現したというのに。その理想のプロポーション、つまり、バスト89cm、ウエスト89cm、ヒップ89cmを得るために涙ぐましい努力を重ねてきたのだ。それまでのヒデコのサイズは、バスト85cm、ウエスト55cm、ヒップ85cmと、なんとも醜いものだった。歴史の本によると、遠い昔、21世紀ごろには、以前のヒデコのような、ウエストのくびれた体型が理想とされた時代があったようだ。しかし、この31世紀の現代において、そんな体型をしていたら、うしろ指をさされる。事実、ヒデコも以前、そのくびれたウエストをあざ笑われたことが何度もあった。

「や〜い、腰くびれ〜！」

TVのフィットネス番組のインストラクターのおばちゃんがいつも言うてる。

「皆さん、腰がくびれては嫁にいけないよ。完璧なズンドーを目指して、さあ、始めましょう！」

そして例のズンドー体操を始めるのだ。

「いっとにととズンドー、さんとしととズンドー、よっころしよーのホイサッサッ！」

スタジオの地響きでTV画面が揺れてよく見えないけど……。

デパートのダイエット食品売り場では、ウエストを増量させると謳う、怪しげな商品が溢れている。いわゆる、

「ズンドー一発一週間！」「ズンドコズンドコ貴女もズン胴」「ドカーン

とズンドー貴女自身」「夢のズンドー、目指せ嫁の座」

どれにしようか？ヒデコが迷っていると、男がそ〜っと近づいてきて囁いた。

「お嬢さん、実は昨日完成したばかりの画期的な新製品がありましてねえ。“ナイスバディ、さらば四苦八苦”と言う商品なんですけど効果は保証します。アッという間にすべて89cmです。どうです試してみませんか？」
かつて、ウエストが2cm減ったことで見合いをキャンセルされたヒデコは裏にもすがる思いだった。

「そ、そのナントカ四苦八苦、ぜ、ぜひ、いただきますわ」

「いいですか、服用の順序を決して間違えないで下さい。まず、この赤いカプセルを飲み、5分後に青いカプセルを飲む。すると10分後に体内で融合し、その時発生する特殊エネルギーが体外空間に漂う脂肪粒子を素早く体内にテレポートし、さらに体内3箇所精密に等分アレンジメントし、さらに……」

ヒデコはうわの空だった。一刻も早く試したかった。明日はいよいよ見合いなのだ。

服用する順序を間違えたことに気が付いたのは、サイズを測った瞬間だった。

「ギャーッ！」

ヒデコの悲鳴がマンション中に響きわたった。

スリーサイズは、すべて正確に49cmだった。ついでに頭のサイズも、そして足のサイズも……。

《久しぶりのアホなフィクションです。このコラムの初期に書いた、月世界を舞台にした壮大なロマン“ヒデコの恋”以来ですね。秀子さん、どうです、ご感想は？ エッ、い、いたく傷ついた?! ……………ゴ、ゴメンナサイ、ワッ(泣)！》

このコラムの連載もそろそろ打ち切りね、ふんっ……………秀子

fados canções

風の翼

わたしは荒れ野 わたしは山
さわやかに吹き過ぎるそよ風
泉からほとばしる
涼やかな水
うす紅色の花咲く薔薇

わたしは花々の香り
こころの拠り所
愛の娘にして
哀れみの姉
そして苦悩の母

この胸に栖^すむ
一羽の赤い小鳥
わたしに繋ぎとめられて
行き迷っている

わたしは荒れ野 わたしは山
月影さやかな夜
花ならローズマリー
におい立つジャスミン
赤いひなげし

わたしは春の花
わたしは夏の夢
広々とした平原
さし伸べられる手を待つ
人影のない浜辺

熟れてなお青い
こころの果実
乾いた涙
消えやらぬ痛み

わたしは荒れ野 わたしは山
わたしは かぐわしい朝
広々とした平原
人影のない浜辺
打ち捨てられた島

わたしは荒れ野 わたしは山
もぎとられた青い果実
香り高い薄荷草
柔らかなオリーブの木
消えてしまった涙

風の翼にのって
定めにあらがう
野生の薔薇の木は
切られたりするものか

ASA DE VENTO

LETRA : Amália Rodrigues
MUSICA : Carlos Gonçalves

Sou charneca sou monte
Brisa a correr ligeira
Sou água fresca
A correr na fonte
Sou rosada roseira

Sou o cheiro das flores
Fê do meu pensamento
Filha de amores
Irmã das dores
Sou mãe do sofrimento

Tenho no peito
Um pássaro encarnado
Que anda sem jeito
A mim amarrado

Sou charneca sou monte
Sou noite enluarada
Flor de alecrim
Ramo de jasmim
Sou papoula encarnada

Sou flor de Primavera
Sou sonho de Verão
Planície aberta
Praia deserta
Que espera a tua mão

Coração fruto
Que é maduro e verde
Meu choro enxuto
Dor que se não perde

Sou charneca sou monte
Sou manhã perfumada
Planície aberta
Praia deserta
Sou ilha abandonada

Sou charneca sou monte
Verde fruta colhida
Erva cidreira
Mansa oliveira
Sou lágrima perdida

Asa de vento
Inimiga da sorte
Roseira brava
Não há quem te corte

cartas

●昨夜、皆様と共に。本当に素敵なコンサートでした。当日券もあとわずかでしたね。チケットがあつて良かった、と思うと同時に、席が埋まるほどのご盛況に、わたくしごとのように嬉しく思っていました。周りを見渡せば、私などより、たくさん年を重ねている方々で埋まっており、私はまだまだ、ファドを聴く境地に至っていないのでは…と、恥ずかしく思われ。たくさん年を重ね、たくさん重ねた時の重さを、心の中に深く留めて尚、それぞれの往く時を謳歌なさっている皆さんを見て、今の自分の日々への思いは、このままで良いと。それでも何時かきつと…と、月田様の心を這う様な歌声と共に、心震わせずにいられますんでした。

英五の唄を本当にありがとうございました。一緒に口ずさんでいました。彼を愛してやまない人たちの心に、今も彼は生き続け、共に唄っているのでしょうか。そして、彼が叫び続けたたくさんの想いは、たくさんの方の

胸の奥深くに届くでしょう。歌の持つ力、ですね。日々の暮らしの中では、右往左往し、時はあわただしく過ぎ…。昨夜は、ほんの2時間余の時でしたが、静かな時をありがとうございました。月田様の歌声が、時の中に流れ……。時もまた、歌声とギターのと共にありましたね。あの場にいた皆のそれぞれの想いは、優しさに包まれて昇華されたのではなかったかと、そう思います。本当に、素敵な時をありがとうございました。月田様へ。コンサートにいた皆様へ。

●今年、偶然にNHKに出演されていた月田さんのファドを聞いて以来、東京、河口湖、横須賀と生歌に触れ、すっかりファド中毒になってしまいました。アマーリアを耳にしたのは、月田さんの運命であり、そしてファドを歌うことは宿命である、と勝手に私なりの解釈をしています。その宿命の歌を私の心のともしび（明かりではないかな？）として、これからの私の人生にずっと灯していきたいと思っています。熱い歌をいつもありがとうございます。（静岡/T・H）

informação

●月田秀子が、1月14日（水）午前11時～11時40分放映の、NHK衛星第二放送番組「公園通りで会いましょう」に、弦哲也さんのゲストとして出演いたします。公開生放送です。来場ご希望の方は、ファド倶楽部までお電話ください。（数に限りがありますので、お早めにお申し込みください）

●今年の定期ライブのご案内（*変更する場合がありますので、お店にご確認ください）
 東京・四谷「カーザ・デ・ファド」 : 毎月第三水曜、木曜日
 大阪・心斎橋「アートクラブ」 : 毎月第四木曜日
 大阪・南方「三裕の館」 : 毎月第四金曜日
 京都・四条河原町「巴里野郎」 : 毎月第四水曜日

<月田秀子のスケジュール>

1月14日（水）	NHKBS2「公園通りで会いましょう」公開生放送	
21日（水）	東京・四谷「マヌエル・カーザ・デ・ファド」	予約・問合せ：03-5276-2432
22日（木）		ステージ：①9:00から3回（入れ替えなし）
28日（水）	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ：075-361-3535
	ステージ：①8:00 ②9:00 ③10:00（入れ替えなし）	チャージ3,500円
28日（水）	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ：075-361-3535
	ステージ：①8:00 ②9:00 ③10:00（入れ替えなし）	チャージ3,500円
29日（木）	大阪・心斎橋「アートクラブ」	問合せ：06-6212-2870
	ステージ：8:00から3回（入れ替えなし）	チャージ：2,800円
30日（金）	大阪・南方「三裕の館」	問合せ：06-6304-1745
	ステージ：①8:00 ②9:00（入れ替えなし）	ワイン・オードブル付5,000円
2月18日（水）	東京・四谷「マヌエル・カーザ・デ・ファド」	予約・問合せ：03-5276-2432
19日（木）		ステージ：①9:00から3回（入れ替えなし）
25日（水）	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ：075-361-3535
	ステージ：①8:00 ②9:00 ③10:00（入れ替えなし）	チャージ3,500円
26日（木）	大阪・心斎橋「アートクラブ」	問合せ：06-6212-2870
	ステージ：8:00から3回（入れ替えなし）	チャージ：2,800円
27日（金）	大阪・南方「三裕の館」	問合せ：06-6304-1745
	ステージ：①8:00 ②9:00（入れ替えなし）	ワイン・オードブル付5,000円
29日（日）	神戸・三宮「あいり」	予約・問合せ：078-241-1898
3月17日（水）	東京・四谷「マヌエル・カーザ・デ・ファド」	予約・問合せ：03-5276-2432
18日（木）		ステージ：①9:00から3回（入れ替えなし）
24日（水）	京都・四条河原町「巴里野郎」	問合せ：075-361-3535
	ステージ：①8:00 ②9:00 ③10:00（入れ替えなし）	チャージ3,500円
25日（木）	大阪・心斎橋「アートクラブ」	問合せ：06-6212-2870
	ステージ：8:00から3回（入れ替えなし）	チャージ：2,800円
26日（金）	大阪・南方「三裕の館」	問合せ：06-6304-1745
	ステージ：①8:00 ②9:00（入れ替えなし）	ワイン・オードブル付5,000円

<編集後記>

年末恒例のコンサートを終え、今は臍抜けの月田。それでも新しい年は巡りくる。時の歯車は狂いもなく刻まれてゆく。人は自分を投影する何かを求めている。私にとってそこにファドがある。

（月田）

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第41号
 ■2004年1月1日発行（季刊：年4回発行）
 ■編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
 ■〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
 ■TEL&FAX 03-3458-9806